

南方（スマトラ）

石油基地バリクパパン従軍記

京都府 新宮 千秋

私達、舞鶴海軍工廠九人の任務は、海軍基地（第二十二根拠地隊）艦艇修理と、町（バリク）全体の機械設備の新設と修理であった。戦友会ポルネオの軍人、足立氏の任務は防衛戦闘で立場は異なっていたが、バリクパパンでの製油事業という、日本国の国策を戦争遂行という任務においては、目的を一つにしていたものであった。本調査は立場においては異なったが、ポルネオ島における労苦は同じであり、本聞き取り調査にご協力を

頂いた次第である。

私の任務地、バリクパパン、第百二海軍燃料廠は、昭和十七（一九四二）年二月、バリクパパンの製油所の規模、能力、被害状況が判明したので、軍需局では、バリクパパン製油所第三作業部長として渡辺伊三郎海軍大佐を任命した。

そこで、三菱石油を中心とした三菱系の諸会社から職員を徴用して、独立した燃料廠とするため要員五〇〇人を編成した。先発隊として調査のため派遣されたスタッフは、製油所に必要な器材を発注し、三月三十日、横浜を出発し、バリクパパンに着いたのは四月八日であった。

誕生当時の第一〇二海軍燃料廠の主要人員は次

の人々により編成された。

廠長 海軍少将 森田 貫一
総務部長 海軍大佐 緒方 清
会計部長 主計大佐 松田 盛雄
製造部長 海軍大佐 遠藤 政治
造修部長 海軍中佐 鰐原 栄一
企画部長 海軍大佐 渡辺伊三郎
医務部長 軍医大佐 柿崎 狷介
その後、復旧作業は進められ、第二蒸留工場も稼働、昭和十七年末には、一応修理も終了し、全力運転に入った。

かくして、まさに「ガソリン一滴、血の一滴」の貴重な石油は生産され始めたのである。

石油の町、バリクパパン

「バリクパパン」とは「板がひっくり返る」という意味である。昔台風でよく小さい舟がひっくり返ったので、この名前がついたという。

バリクパパンは、ボルネオ島（インドネシア

領、東カリマンタン州）にある。昭和十七年七月頃は、二万五千人程の小さな町であったが、現在では、人口四十五万の大都市になっている。

南国情緒あふれる椰子の林がどこまでも続く海岸は遠浅で、夜ともなれば、月光の下、そよ風にゆられて、何とも言えぬムードがただよう。

バリクパパンの港周辺は、石油基地としての設備が建設されていて、数十もの巨大石油タンクが群立し、整然として並び、東アジア石油輸出港として賑わいを見せていた。

オランダ系資本六〇％、英国系資本四〇％のバタフセ石油会社（B・P・M）が、オランダ人二〇〇人と、六〇〇〇人に及ぶ現地人従業員を雇用し、堂々たるものであった。

原油は九〇キロ離れたサンガサナガ等からパイプ輸送され、年間一六〇万キロリットルの処理が行われていた。

この石油基地はB・P・M社にとって、東洋の中心的な存在で、なかでも、航空機用潤滑油は良

質で、かつ豊富なため、関係各機関からの注目の
的となり羨望の目が注がれていた。

石油不足に悩んでいた日本は、太平洋戦争の緒
戦においてこの石油基地を掌中に収めることがで
きたのである。

そこで、海軍は、直ちに破壊された石油基地を
復旧するため、国内より技術者を派遣させて、そ
の復旧に取り掛かったのである。

こうして、バリクパパンは、日本の手によって
再び石油の積出港としての形を整え、燃料廠が建
設され、従業員も従事し、石油町バリクパパンは
活気付いてきた。

石油基地を守るために、第二十二特別海軍根拠
地隊が駐屯し、砲台の設置、航空隊の開設。水上
基地の建設と、石油の町は軍備を整えていった。

その後、南方方面（ソロモン）戦況が厳しさを
増すにつれて、バリクパパンも臨戦の準備が進め
られ、軍基地としてのバリクパパンへ変貌してい
くのであった。

平和であれば、文化活動も台頭し、いろいろの
歌も流れた。例えば「見よ東海の空あけて……」、
「真白き富士のけだかさを、心の強い楯として」
などで、インドネシアの愛唱歌「ブンガワンス
ロ」なども、日本人もよく歌ったものである。

この歌はポルトガル人がオランダに負けて、そ
の時、故郷を偲んで歌ったのが、その原型と言わ
れている。南方から帰国した軍人、軍属などに
よって日本でも広く歌われるようになった。

戦況は、時と共に我が日本軍に不利となつて来
た。昭和十九年、無事二年間の軍務を終えて、い
まバリクパパンを離れようとしていた。船は汽笛
を響かせ、徐々に栈橋を遠ざかっていった。南国
特有のガラガラとまばゆい空、平穩そのものの港
の景色、さまざまな思いを胸に、私達は甲板で手
を振り、別れを告げていた。栈橋から五〇〇メー
トルぐらい離れた時、突然大音響と共に六〇〇〇
トンの巨体が浮き上がり、その瞬間に船が傾い

た。あっ、と思ったが、声も出ず、甲板を右往左往するだけ、しかし、不幸中の幸いで港内は浅く、すぐに船底が海の底についた。

船から「SOS」が発信されたのか、棧橋よりランチの群れが全速力で白波を蹴立て近付き船をとり囲んだ。しばらくして荷物をまとめてランチに乗り移り、ようやく上陸したが、その時の恐怖は強烈で、なかなか治まらなかつたのを今尚よく覚えている。

私達がバリクパパンに着任して一年余りは戦線も順調に進み、平穩無事と言っても遙かに遠いソロモン島であつたため、この辺は平和そのものであつたが、ソロモンの戦況不利が伝わる頃は、それに呼応するように、バリクパパンの空にも敵機が飛来するようになり、その時に敵は機雷を敷設し、我々の帰還船はそれに抵触したのである。

その事件後一カ月経って再び船に乗り込み、帰国の途についたが後遺症が残り、シンガポールまで、心びくびくの海路であつた。

シンガポールからは空母、駆逐艦なども加わつて船団を組み、祖国へと帰つて来られた。

帰還前の我々の任務である陣地調査の状況について申し述べることにする。スピングンの飛行場建設現場までは、トラックで送ってもらい、そこからは背梁山脈をバラマッタの方へ入つて行つた。砲台方面を望みながら、溪谷の地質、地形、方位などを、クリメーターで調査しながら奥地へ行くのである。

しばらくは、褐色のステップを登つて行つた。だんだん溪谷の幅が狭くなり、原生林がびっしりと覆ってくる。ケモノ道は避けて、尾根筋を歩くように心掛け、周囲の地質、地形、背の走行方位など、可能な限り詳しく記入してくるのである。

ジャングルの中は巨木が生い茂り、日の光は遮られ、足元はうす暗く、いろいろな隠花植物が密生しているので、一步、一步を気をつけなければならなかつた。

突然横の谷間で、大きな猪が「ギャ、ギャ」と吠えた。鷺見少尉が拳銃を取り出して、サッと身構えた。

猪共は素早くジャングルの奥深く逃げ込んでしまった。後で考えてみると、彼らは、水溜りに来て、体についたダニを落すべく泥遊び中であつたらしい。そこへ、我々が闖入したので、びっくりしたのであろう。はじめは、猪と思つたが、或るいは野猪であつたかも知れない。彼らも驚いたが我々も緊張した一瞬であつた。

火焰樹の豪華な赤い花を見上げながら、三人はどんどんと奥地へ進んでいった。この辺の地質は洪積世のタナメラで、その混地帯の頁岩に混じつて、うす紫色の柱状結晶体を見付けた。試みにあつたりの石を次々とひっくり返して見ると、やはり出てくる、出てくる。アメジストのようであつたが、ルーペでよく見ると、それはコルンバイトである。これは、多量のジルコンを含む鉍石で、非常に貴重なものである。

次の日も、なお奥地へと調査を進めたがこの時の調査結果が、どのように報告されたのか、知るよしもなかったが、その頃から戦況は日増しに厳しくなつていった。

後日、アメリカが、バリクパンへ上陸し、日本軍は、苦勞して建設した一〇二燃料廠を自らの手で破壊し、ジャングルの中へ進んで行く時に、この調査がいかに利用されたか知りたいが、その情報はなかつた。

第一〇二燃料廠の消滅

我々が、バリクパンを離れて内地へ帰還したが、昭和二十年には戦局は硫黄島玉砕、三月、比島マニラ陥落するなかにあつて、六月十五日、燃料廠では「一〇一号作戦」と称する施設破壊作業の命令が発動された。六月二十日、午前零時、燃料廠は、正式に解散となつた。

連日の敵の攻撃により、周囲のタンクには火が燃え移り、炎の海に閉じ込められて脱出不能の状

態になってきた。廠舎にこもる徴用員達の頭上を越えて、敵弾はサマリンダ海道に布陣していた日本軍陣地に向けられるようになっていた。

この時点にあつて、いよいよ「総員撤退、次の任につけ」の命令が下つた。廠舎は敵の攻撃と、自らの破壊で廃虚と化し、燃え上がるタンク、破壊される製油所、巨大な炎と、天をも覆う黒煙、その火災地獄の中を、最後まで残っていた主計隊員は、防空壕内の電話器などをそのままにして、壕内を脱出、夜陰にまぎれて後方に展開、やがて、構内は無人の廃虚と化してしまつたのである。

軍人でもなく、軍属でもない田村徴用員はその中の一人であつた。長い間勤務した、廠舎や施設が焼け落ちて行く姿はたまらないだろうが、そんな感傷に浸っている余裕は無かつた。次の任務に向かつて同僚と共に、夜陰にまぎれて、陸路ワイン地区目指して転進していった。

こうして、オランダが築いて、それを破壊して

逃げ、その後を日本軍が復旧し、アメリカの攻撃によって撤退する日本軍が、その製油所を、自らの手によって破壊することによって、最後の抵抗をジャングルの中で行うのであるが、それも長くはなく、ここに、第一〇二燃料廠は消滅したのである。

戦争とは、かくも無残なものである。地球上に神が居ますなら、限られた資源を、人間のおろかな行為（戦争）によって、無駄使いしないようお告げをして欲しい。

戦争の労苦を風化させないで、戦争の無意味を叫び、平和の尊さを一生伝えていきたいものである。